



南側・北側日本隊隊員

中国・日本・ネパール一九八八年チヨモランマ/サガルマタ友好登山隊の、日本山岳会としての報告会が六月十八日、東京・新富町の東京都勤労福祉会館ホールで開かれた。

この報告会には、関東近県の会員はもとより、地方会員も多数参加、また来日中の中国、ネパール両登山隊員も加わった。

冒頭、挨拶に立った、登山隊総隊長も務めた今西寿雄会長は、「この登山を実施するに当って、関係各位、わけでも会員の皆様から多大のご支援をいただき、お陰様で無事終了したことに對し、厚くお礼申し上げます。

「げたい」との謝意のあと、「実施面では大塚博美総副隊長以下、南北両登山・登攀隊長を中心に、緻密な計画の下に遂行されたことが、その成功に繋がった」ことを強調すると同時に、「この三国友好登山が終わったからといって、参加隊員のすべてが終わったわけではなく、今後は日本山岳会の発展のために、その力を注いでもらいたい」との要望も行なった。

続いて南北両登山・登攀隊長から大要次のような報告がなされた。

湯浅道男南側登山隊長 水腰英隆隊員の突然の死は、若い隊員の心の中にポツカリ穴があいたかも知れない

橋本清北側登山隊長 まず最初に、

磯野剛太南側登攀隊長 今年の南側の状況は、低温で積雪も少く、冬の状態を持ち越した感じであった。アイスフォールにも同じことがいえ、その反面、ナダレ、ブロックの心配はなく、安全な、行動しやすい状況にあったといえる。五月五日の交差縦走に備え、万全の体制をとったものの、いろいろなアクシデントが重なり、不本意な形となったのは非常に残念である。しかし、縦走隊を送り出したことは幸運だったと思う。

三国友好登山隊の報告会ひらく



1988年(昭和63年)

8月号(No. 518)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 三国友好登山隊の報告会……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「アイガーに舞う」
- 「海外トピックス」
- 横浜ウェストン記念祭開催……………(3)
- 談話会の講演から
- 科学研究委員会……………(4)
- 図書紹介……………(6)
- 「かぬか平の山々」「ふみあと10号」「白神山地二冊の本」
- 「雷鳥の尾根」
- 東西南北……………(8)
- 自然保護随想……………(9)
- 報告……………(9)
- 医療委、高所登山研究委、信濃支部、越後支部、北海道支部、秋田支部、東海支部、福岡支部
- 追悼「ボンコ」さんを憶う……………(13)
- 会務報告・ルーム日誌……………(13)
- 新入会員、会員住所等変更……………(14)
- お知らせ……………(15)
- 三国登山会員募金応募者ご芳名……………(15)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日

13時～20時

●ルーム夏休み

8/15(月)～8/20(土)

お詫び申し上げます。しかしながら、三国の力を分かち合うというこの体験は、若い隊員たちが明日の日本山岳会を担う。大きな原動力となろう。そういう意味からも、われわれの後輩を、暖かい目で見守り、育てていただきたい。

が、南側からの計画は、われわれの力を含めて、一応達成されたものと時う。交差縦走に日本隊が同行していない点については、いささか画竜点睛を欠いた面があり、これは皆様に

お知らせテブ電話

234 六六五九

海外の山

アイガーに舞う

初期目的の、北側からの縦走が出来たことは、皆様のお陰であると心からお礼申し上げたい。今回の計画は、三國平等という合意の下に、特に荷物は、ABC以上は隊員各自が平等に背負うということ、過去のヒマラヤ登山での、パラサンプとなつてシエルバに荷物を背負わせるという形式とはまったく異なり、この点隊員には負担がかかったと思う。テレビで見る限り、日本隊員は何をしていったか、という面はあるが、七十日に亘る隊員の労苦を考えると、今はただ、ご苦労様でした、としかいいようがない。特に二十代の隊員が頑張り、日本山岳会の明日を考えると、すべてに耐えてくれる隊員が出て来たことに、大きな喜びを感じる。

重広恒夫北側登攀隊長 南北から同時に登り、交差縦走を行なうとともに、テレビ生中継という三つの目標に、三國共同でそれを成し遂げてこそ、完全成功といえるものであった。各国の共同成果を謳うためには、ABC以上、各国が同一の荷物を、同一の重量で、同一の場所に荷上げすることが、今回の計画の骨子となつた。三國ともその土俵は違ひが、お互いに友好親善を図りながら、結果的にみて、予想以上の各国の協力と、スムーズな荷上げ、恵まれた天候に、この成功の大きなポイントがあつたと思う。長時間

二機のヘリコプターで山頂直下に入り立った取材班を含む一行七人は、七、八時の風に一瞬滑空をためらつたという。結局ベテランの高橋和之だけが挑戦することになった。

パラグライダー滑空の難しさは一にも二にも離陸の瞬間に集約されるという。その瞬間の怖さは何度飛んでもなかなか慣れるものではないらしい。ましてここはヨーロッパ・アルプスのアイガーのてっぺんなのだ。

西壁に飛び込むような形で高橋は宙に身を踊らせた。風につけて見事な滑空が始まつた。七月二十五日。麓のグリンデルワルトに舞い降りるまで二十五分の贅沢な空の散歩だった。

「アルプス探検に成功した日本の一青年、何人も成功し得なかつたアイガー登山三名の案内者を連れて峻険を突破す」大正十年九月十三日というから今から六十七年前の朝日新聞にこんな活字が踊つた。当時二十七歳の植有恒がアイガー東山稜を登つた時の一報である。

この時の山好きの実兄の談話

「今回弟が踏破したアイガーは高さで四千位位しかなくて既に外国人によつて登られて居るし、其口からは弟も登つた事があるやうですが幾多のアルプス通が企画してどうしても登り切らなかつた口から遂に登り切つたのが今回の壮挙だと思はれます」

ルートのことを「口」と言っているのが面白い。

エヴェレストと同じくらい数多く世界のジャーナリズムに登場してきたアイガー(三九七〇呎)が初めて登られたのは一八五八年八月十一日である。植達の東山稜初登攀はそのさらに半世紀後のことだ。しかし、その名が登山と無関係な人々にまで広く知れわたつたのは、北壁をめぐるさまざまなドラマによつてだろう。

H・ハーラー、A・ヘックマイヤー、F・カスパルク、L・フェルクの四人による八五時間の戦いの末、アイガー北壁は一九三八年七月二四日、初めて人類に身を任せた。そして、それからちょうど五〇年たった今年、日本の四十五歳になる中年男がそのてっぺん直下から空を飛んだのである。

グリンデルワルトでは「北壁五〇年」を祝う祭りが催された。初登攀者のハーラーのほか高橋の妻、通子、加藤滝男ら一九七〇年に『ジャパン・ディレクティシマ』を完登した日本人クライマーや冬の三大北壁の長谷川恒男らもその場に招かれた。アイガーは日本人とも関わりの深い山だ。

既に八千呎峰のチョー・オユーの頂きからパラグライダーで飛んだ経験のある高橋和之は四十歳を過ぎてからがぜん気を吐いているクライマーの一人である。田部井淳子、原真らベテランの域に入っている男や女たちが平然と挑戦的な山登りを続けている姿勢には、刺激的なものがある。

この二、三十年海外登山というもっぱらヒマラヤが脚光を浴び続けてきた感があるが、アルピニズムを生み、育ててきたヨーロッパ・アルプスにも着実に新しい歴史が書き込まれている。

(江本嘉伸)

の頂上滞在は、急激な体力の損耗に繋るので、南に向って縦走を開始したが、それでも滞在時間は長すぎたからいがある。

このあと壇上には、来日中の中国、ネパール登山隊員が紹介され、曾昭生中国北側登山隊長は、「中国・日本・ネパール登山隊の最も重要な意義は、各国が協力して行なったことで、これなくしては成功はあり得なかったことであろう。登山史上、最も記念すべきことである」。クンガ・シェルパ、ネパール南側登山隊長は、「今回の三国友好登山は、お互いの友情と理解を深めたことに意義があり、このたび築きあげられた友情は永久不変である。今回の事業は、登山史上においても、歴史的な事業であったといえる」と、それぞれ両国登山隊員を代表して挨拶した。

また、北側から縦走を行なった山田昇隊員は、今後のチョモランマの展望について、「交差縦走は、無酸素、単独などの一つの登山形態として受け止めている。世界の最高峰として常に注目され、常に新しい形が持ち込まれ、脚光を浴びている山だし、登山界が注目するような登山はなかなかみつけないと思う。単独ということは仮定の問題としても、それに一步近付きたいし、私としては世界のトップレベルに

海外トピックス

●UIAA (国際山岳連盟) は、九月二十五日を第二次国際山岳クリン・デイと定め、加盟団体に呼びかけ、世界的なキャンペーンを行なう。今年は、特に山の水と流れの清掃化に重点を置く。

●第五回、国際ヒマラヤ登山、観光集会在、九月二十三日から二十五日までの三日間、デリーより二四〇・離れた、ヒマラヤ山脈を一望のもとに見渡せるムツソリーエで開催される。(1)山の環境保全のための具体的活動、政

どのくらい近付けるか、日本人の実力がどのくらいのものか、今回のことを踏み台として、一步進めた登山をやりたい」と語った。

スラトド映写をはさんで、しめくくりの挨拶に立った大塚博美副会長は、会員の物心両面に亘る多大な協力に重ねて謝意を述べるとともに、「読売新聞社から三国登山隊としての公式報告書が早い時期に出ることになっているが、日本山岳会としても独自に、この報告書の資料編を出すつもりで準備を進めている。すばらしい内容になると自負しており、大いに期待して欲しい」と結んだ。報告会終了後は、席を移しての懇親会が、登山隊員を囲んでにぎやかに持たれた。

なお、司会・進行には北側総務を担当した伊丹紹泰隊員が当った。(写真・平戸孝夫/文責・高田真哉)

ウェストン来日百周年記念

横浜ウェストン記念祭開催

ウォルター・ウェストンが来日して、今年には百周年に当たる。三月二十一日にウェストンゆかりの横浜聖アンデレ教会で『横浜ウェストン記念祭』が開かれ、山岳会、教育関係者約八十人が集まった。

ウェストンは一八八八年(明治二十年)四月一日に神戸に上陸、日本には前後三回にわたって、あしかけ十四年いたとされている。この来日百周年を記念して、ウェストン研究者として知られている逗子聖ペテロ教会牧師の垣内茂師が記念祭を企画、山岳会の後援について島田巽名誉会員に協力を要請し、実現したもの。

記念祭は第一部『ウェストン司祭逝

府筋の積極的な関与、(2)冒険旅行ならびにスポーツの状況、(3)岩登りとその発展、の三つを主要な議題として討議する。主催はインド山岳財団。

●スイス、ディアブルレ国際山岳映画祭は、九月十九日より二十五日まで開催される。連絡は

FFAD c/o Mr. Jacques Lavanex Ave. Crozet 44 CH-1219 Genève. Tel: 022-96-97-71

●UIAA総会は、九月十日、カナダ、アルバータのバンフで開催される。世話人は、カナダ山岳会。

(海外委員会)

海外の山

去者記念式」を午後一時から約一時間、山手聖公会の石川師、横浜聖アンデレ教会の山崎師による追悼、垣内師による『横浜聖アンデレ教会の移築』などウェストン師の在日中の業績に関する講話が行なわれた。

第二部は山岳会が中心となつて、記念講演が行なわれ、今西会長と、島田名誉会員による「ウェストンと岡野金次郎氏との出会い、小島鳥水、高野鷹蔵、武田久吉らとの交流から、山岳会発足の経緯、ウェストンの日本の近代登山への貢献と意義」などについて、講話が行なわれた。

続いて、一九三〇年から三一年にかけてイギリスへ渡り、生前のウェスト

ンと交流のあった、山岳会の国分勘兵衛氏(永年会員)の「ウェストンの想い出」と題する講話、とくに「ウェストンの紹介で王立地理学協会の終身会員となつて、同協会百周年を記念して慶応大学図書館に「ジオグラフィック・マガジン」の創刊号から百年分の雑誌が寄贈された」などの興味深い話があった。

二十分休憩の後、安江守宣会員(岡山大学名誉教授)による記念講演「街中のウェストン」がスライド映写つきで行なわれ、最初の任地熊本、神戸の教会、横浜時代、それぞれについて、当時の風景と現在、地図をまじえながら比較する興味ある講演が行なわれた。

当日は、宮崎ウェストン祭を主催している魚本定良宮崎支部長、山岳八二年版にウェストン年譜を安江氏とともに調査、発表した三井嘉雄会員(松本在住)、川村宏会員(大阪在住)のほか、ウェストン研究家の元大町教会牧師太田愛人氏らが出席し、またウェストン来日の際に通信士として乗合わせ、その後、牧師となった東海林定一師など、ウェストンゆかりの人々が多数出席し、盛会であった。

会場ホールには山岳会が所蔵しているウェストンのレリーフなど、次のような展示品が飾られた。

談話会の講演から

科学研究委員会

当委員会で行なった談話会の内容は、本年二月十八日が「東南アジアの薬草」(山口一孝氏)、三月二十五日が「登山の行動科学・発想」(千葉重美氏)、「登山の行動科学・遭難のシミュレーション」(小山内正夫氏)、四月十六日が「山の航空写真あれこれ」(大森弘一郎氏)で、それぞれルームにおいて開かれた。講演要旨は次のとおり。

●東南アジアの薬草

老後を想い家族と共にネオシルヴァライフをスタートする決心がつきその準備にとりかかったら、数十年前忘れていた東南アジアの薬草の抄録の資料と、Kirtikar & Basu: Indian Medicinal Plants (Allahabad, 1918) 黒田辰一郎・仏印薬用植物(陸軍軍医団、一九四三)のパンチカード計二〇二〇枚に再会した。

私が生薬学のプロの時はこれらの伝承的な薬草から有効成分を取出し分析して化学構造を決定し、さらに同様にまたはそれ以上の薬効と、それ以下の副作用をもつ新化合物を合成して医療に供するのが目的であった。ところが同じ資料を久し振りに抄録し直して気付いたことは、薬効の対象に、レブラ、肺病、コレラ、赤痢、腸炎、蛇病、その他動物の咬傷、寄生虫病、皮膚病、ガン腫瘍、性病、白帯下、通経、だ胎、強壯、強精、催淫、リユーマチ、中風、痲痺、脾臓、鎮静、神経障害、健胃、体液調整変質、利胆脾肝、利尿などが実に多いことで、改めて熱帯の自然と環境に生きる庶民の知恵と体臭と悲願をひしひしと感ずることができた。彼等こそ生薬学の先生

である。

しかしもしもわれわれがジャングルでコブラに咬まれた時は、伝承の薬草に頼るよりもその血清を求めることが急務であることを書き副え蛇足とする。

(山口一孝)

●登山の行動科学・発想

今日のように、安寧と豊熟の世の中にあつて登山も、自我の発露にたつた自己実現型の登山になつて来ている。

斯かる時代に立つて考えてみれば、過日の登山は、人間の自然に對しその苦難の限りを尽しての初登頂と、その陰に潜む遭難の歴史であつたとみても過言ではない。しかし、これは、登山の宿命ととられるかも知れないが、本来、登山の本質は、山を愛するものが目的とする山の頂に立ち下山したことによって完結する人間のみがとる行為であつて、その頂に對しての価値評価や、その行為の選択手段は、各人の趣味嗜好による。ある老練な登山家は、「登山には人間的価値があり、社会を健全化させる」との言を遺しているが、登山の社会生産性を論ずるまでには至っていない。

心の偏執の時代にあつて、人が自然と社会の狭間の中で飽くなき葛藤を求めていく、登山の中で能率行動こそが、登山は本来、社会生産性に寄与する。

かかる仮説から、登山の行動科学的な視点から、登山者の個人、集団を問わず、人間工学的なアプローチは、ややもすると管理登山になりつつある傾向に警鐘を与えつつ、登山界に對して、新たな認識を持たせ、人間と社会の狭間にあつて生産単位を確認させる。

* 西堀栄三郎氏の87年JAC年次晩餐会での発言。

(千葉重美)

▼ウェストンの有明山登山画帳からコピー (山岳会所有) 一九一二年 (明治四十五年) ウェストンは石田吟松等と有明山へ登る吟松の画帳 (オリジナルは山岳会所蔵) から複写。

▼ウェストンの書簡二通 (山岳会所蔵)

▼同王立地理学協会宛のコピー (三井嘉雄氏提供)

▼ウェストンの写真 (山岳会所蔵)

▼ウェストンの著書 ① Mountaineering and exploration in Japanese Alps, John Murray, London, 1896. (山岳会所蔵) ② The playground of the Far East, John Murray, London, 1918. (山岳会所蔵) ③ A wayfarer in unfamiliar Japan, Methuen, London, 1925. (会員 安江安宣氏所蔵) ④ Japan, Black's popular series of colour books, A. & C. Black Ltd London, 1926. (会員 安江安宣氏所蔵)

▼ウェストン記念碑の写真 ①一九三七年にウェストンの喜寿を記念して会員佐藤久一朗氏 (故人) が製作した初代レリーフの写真、同二代目写真 (三井嘉雄氏提供) ②時又の天竜川下りの記念碑 (安江安宣氏提供) ③宮崎高千穂のウェストン記念碑 (安江安宣氏提供) ④掘金村の常念坊登山記念碑 (田畑眞一氏提供)

▼ウェストン常念坊登山記念画帳 (征矢野久画内筆) (征矢野久氏から借用)

なお、横浜記念祭に対する山岳会後援については実行委員として関塚のほかに遠藤光男、織田沢美知子、田畑眞

●登山の行動科学・遭難のシミュレーション

海難、航空、原子力等の大型事故はその再発防止のため徹底究明が加えられるが、山岳遭難はその特殊性もあって、裁判のケースを除いて、概略の表面的考察に流れ、叙情的追悼文で終ることが多い。この点、遭難をシミュレーション化して、その解析を通じて科学的な処方箋を体系的に得たいと考え、その手始めに登山行動全体の分析を狙って、如何なる手法が有効かを調べ上げて見た。すなわち、登山を計画準備、行動展開、緊急時意志決定、救難対応の四ブロックに試験的に分類し、夫々の特性を整理した上で、現在自然、人文、社会の各科学面と理工学の諸分野で実用に供されている技法の中で、有望なものを選択した。

内訳は、人間工学 (除心理学、医学) グラフ理論、ゲーム理論、あるいは工学、意志決定理論、システム工学、知識工学 (除人工知能)、カストロフイ理論、安全工学となるが、この中、後半の四分野に関連する解析手法に注目した。しかし、これらも今直ちに即戦力として威力を発揮することは到底無理で、今後チームを編成して実用化のための諸作業 (特に入力データの整備の継続) が不可欠である。以後は機会を得て、統報としてシステム工学応用例、知識工学解析報告等を提出し、会員諸賢の批判を仰ぐこととした。 (小山内正夫)

●山の航空写真あれこれ

「クワサツ」には、未知の山へ登るのに「役立てる」空からの偵察としての「空察」と、山を歩かずに「楽しむ」「空撮」がある。また飛ぶということには、山登りにも参考になる多くの「教えられる」ものがある。「役立てる」——高速で移動する物の中から見るため、写すことが、多くの情報を得るのに有効。地上から見えない角度からも地形を見られる。横に移動することを利

用して、同じ画面を数枚撮れば (対象物までの距離の $\frac{1}{2}$ で200の移動量で) 実体視が可能である。近よれない場合 (例: アマダブラムから南壁) は望遠レンズと高速シャッターの組合せが役立つ。役立つ反面誤認があり得る。凹凸の大きさ、見えない影の部分など、思い込むと仲々なおらない。

この目的の場合は、影の出来ない時間帯を選ぶのがよい。登る前に山が良くわかることは、一面、登山の楽しみの一部をうぶうこともあるし、またその反面として登れない者のウサバらしにはなる。

撮影のコツは、移動の速度につられてあわてないこと。初歩的ミスをおこしやすいので、他の乗物の中で練習するとよい。

「楽しむ」——昔登ったなつかしい山に寸暇で再会出来ることは楽しい。数日、数十日の山行でやっと会える美しい山の姿に、数時間で会うことが出来る。上手に移動すれば、広い範囲にある美しい山を次々におとずれることが出来る。又、地上から見ることの出来ない角度からの姿の中に、自分しか知らない姿を発見することがある。この時は新しい自分だけの山を創造しているような気持ちになる。

また自分で操縦してそれをさがすことが、多少なりとも代理登山の満足になる。しかし、止って、手でふれることの出来ないのが何とも残念。

「教えられる」——登山と操縦とは似た所がある。危険と常に近接していること、天候等自然変化の中を上手に動くこと、自分の位置を常に掴んでいること。判断の重なり、持ち時間が限られ、判断は瞬時でなければならない点は異なる。

この教育法は良く作られている。経験量の内容別数値

談話会の講演から

一、渡辺徹の諸氏が、また展示品については島田巽名誉会員、安江安宣、三井嘉雄、川村宏、神崎忠男の各氏、総務、資料、図書委員会の助力があった。感謝申しあげます。
(関塚貞亨)



図書紹介

かぬか平の山々

日本山岳会岩手支部編
監修 佐藤敏彦

かぬか平の山々とは、われわれの耳慣れない語だが、本書冒頭の佐藤敏彦氏の説明を読むと、北上山地の山々というのとほぼ同義語で、それを土地の人々の俚称に従い、親しみをこめて表わしている語と解される。秘境北上山地を歩く、という副題もついている。

北上山地の山といえ、一般によく知られているのは早池峯で、そのほかには姫神山、五葉山、階上岳(私は昔、この山の名を大島亮吉『山』所収の佳篇「峠」の中で知り記憶にとどめた)ぐらいであろうか。『山日記』一九八五年版(第50輯)の「山自慢」の一章

化(時間)、力量の判断、力量に合せた行動の指導、危険を体験させることとパニックからの回復訓練等良く出て来ている。それでもエラー(事故)がある。
遭難(事故)の美化は少ない。高度順化の考えはない。高空での低酸素については、判断力の低下を問題と

談話会の講演から

として、佐藤氏が阿部館山のことを書いているのを、ご記憶の会員もあろうかと思うが、あのような書き方で北上山地の山が叙述されている。

このような未知で、また地味な山々(早池峯と薬師岳を除いては一三〇〇メートル級以下)、即ち南北二五〇*、東西八〇*の広大な地域に位する山々の約一三〇座について、その一つ一つに登頂し紹介がなされているのが本書である。岩手支部会員諸氏のひたむきな情熱とたゆまざる努力によってなった書でもある。かかった歳月はゆうに十年を超えよう。勿論他に類書を見ない。心から敬意を表したい。

北上山地の山旅で私の記憶にあるのは、沼井鉄太郎氏の大正九年八月上旬十日間にわたるもの(『山岳』17の1所収、「北上山地の旅」参照)と、本書にも引用されている河田楨氏の旅であろう。

私自身も佐藤氏の誘いをうけて何度か訪れたが、彌々子森や桐ノ木沢山からの早池峯の姿や、穴目ヶ岳、白見山は特に忘れがたい。

し、この危険を良く教育し、体験させている。事故は全て失敗である。この常識から見ると「死んだが登頂成功」はあり得ない。「登頂したが死んで失敗」となるべきである。
(大森弘一郎)

次に読後感を率直に述べてみたい。

第一に、全体の山の関係位置が分かるような略図を一葉でもいいから、是非いれるべきであった。略図としては早池峯周辺のものが一葉あるだけだが、これでは北上山地の山に馴染みのない読者には理解しにくい。全体をカバーする略図があったら、読者の興味が一段と喚起されたい。

また本書は所謂ガイドブックではないから、あまり詳細な記述は不要としても、他地域の者が北上山地の山へ行く場合の、現地での交通機関(バス、タクシー、場合によればレンタカー等)についての情報が殆ど述べられていない。支部の方達は自家用車をフルに使っておられるのだが、他地域の者には、そういう方法は一般的に無理であろう。その点の配慮がほしかったと思う。

最後に山名のことだが、姫神山と姫神岳とが混用されている。どちらかに統一するのが望ましいが、現地でも混用されているならその旨を書いておいてほしかった。また境ノ神山は地形図

では堺ノ神岳となっている。これも山が正しいのなら、その旨をかくべきであった。正しい山名の使用は基本的重要な要素の一つで、岳でも山でもよいという訳にはいかない。
カバーのデザイン、殊に真紅の毛筆でかかれた題名は、よい効果をあげている。

B6版二二八ページ・モノクロ写真
数葉 定価一八〇〇円 一九八八年四月 現代旅行研究所刊
(望月達夫)

ふみあと一〇号

三菱伸銅株式会社山岳部

同部は社名変更前は玉川機械金属株式会社山岳部であり、開拓期の奥只見や南会津では大いに活躍し、山溪や岳人でご存知の方も多いと思われる。

日本山岳会越後支部が新潟県境の全山縦走の大計画を実行したのは昭和四十一年のことであり、そのことは「越後山岳第六号」に詳報されている。

会津山岳協会は昭和四十四年に福島

県境の山岳地帯三百数十*の全山縦走を計画し、同部もそれに参加した。

その後この計画がどうなったのか知る由もないが、同協会からはその報告は遂に発表されなかったようである。

同部は、おそらくは未完成に終わってしまったと思われるこの計画をその後二十数年間にわたってコツコツと実行し、遂にその目的を達したのである。その苦勞の成果の集成がこの「ふみあと一〇号」なのである。

職場の山岳会というのは、職場の都合が優先し、登山活動も大きく制約される。四〜五日の連休は五月と夏だけであり、あとは土日連休である。その僅かな休暇を利用して同部は何回も山行を重ねて遂に目的を達したのであるが、その根気と熱意と意志の持続は感動的ですからある。翌朝の定時に出勤するために深夜の六十里越鉄道トンネルを歩いて抜ける話が載せられているが、登山と仕事を両立させることがどんなに大変なことか改めて考えさせられるのである。

福島県境の半分以上は登山道もない未開の稜線であり、人のあまり行かない珍らしい所を歩いているだけに記録と地図を見比べながら読むのもなかなか興味深いものがある。

一九八七年一月、三菱伸銅(株)山岳部、非売品(福島県会津若松市扇

町二八ノ七)

(佐藤 勉)

白神山地二冊の本

「白神山地に生きる」(鎌田孝一著)

白神山地の登山案内書は殆んど見かけないから登山者の多くはこの山に関心が少なかった。それがブナ林伐採と林道建設の計画がでて、春秋林道という名称で登場し世間の眉目を集めたのは皮肉なことである。

著者は白神山地の秋田県側に育ち、少年の日にブナと出会い、やがて奥深い白神の自然に引かれ折を見ては山中に分け入り、溪谷美、ブナの原生的自然、動物とのふれ合いをひたすらに愛し、それらをカメラに納めてきた。

昭和五十七年春秋林道が秋田、青森の県境づたいにブナ原生林を分断する計画を知ってから著者の多忙が始まる。「ブナの林こ、おらどの命だ」と言う農夫の言葉。且つて駒ヶ岳頂上に案内した少年たちの「自然って遠いんだなあ」と言った感動の言葉を思い浮べる。子供たちから自然を奪ってはならない。遠くへ追いやってはならないとの思いが活動の軸になっている。

息子や娘の受験や進学にも上京したことのない田舎っぺの著者が、なれな

い国会、林野庁、環境庁を訪れる。著書でふれているが私もその上京の折、国会の議員会館で著者にお会いした。誠実で素朴な人柄が印象に残っている。なれない中央官庁との折衝のほかに、この自然を守るためには書く以外にない。との思いが本書を完成させる。そのために五十代の半ばから文章の勉強もしたという。

しかしこの本は単なる山の自然保護の本ではなく、白神における植物の新しい発見の感動があり、世に知られていない密められた沢の踏査行など、白神の魅力に満ちた本である。

四六版二一三頁 一九八七年八月再版 白水社 定価一六〇〇円

* 津軽白神山がたり (根深 誠著)

青森県南西部と秋田県北西部にまたがる三万ヘクタールに及ぶ白神山地は主峰白神岳一三三二メートルをはじめ、県境に一〇〇〇メートルの山なみ

が連なり、ブナの原生林が広大にひろがっている。従って溪谷に水量も多く、ゆるやかな流れ、激流、滝と千変万化の美しさがある。且つて七三年版の「山岳」に佐藤勉、坂本知忠両会員が白神山地の登山記を発表している。両氏は七〇年から七六年にかけて九回もくり返し、白神の登山と遡行をし

「自然破壊の著しい日本の山岳の中にあって誠に貴重な、かけがえのない存在」と絶讃されている。だが、この詳細をきわめた報告も余り登山者の関心を呼ばず、その後も白神に出掛けた登山者は多くない。

秋田の鎌田氏が「白神山地に生きる」を出したのと時を同じくして、本会会員で青森在住の著者が本書を書いた。同氏はエベレスト南稜、ヒマラルユリなど多くの海外登山を果たしたオーラルランドの登山者だが「ヒマラヤと白神岳では、その規模からしてたいへんな違いです。しかし、白神を遠くに眺めてヒマラヤを想起する私の立場からすれば、その魅力は同質のもので」と書いているように、マツキンリ―の氷雪の世界から帰ると、やさしさが欲しくなるとしてブナの白神の山に行きたくなるといふ。十八才の時から(六五年)折にふれて入山した白神のこの二十数編はブナの山、伝説の山、マタギの山の魅力を手なれた軽い筆致で語っている。

最後に著者は、恐らくは日本で一番貧しいと思われる西目屋村―ここが春秋林道の青森側基点―が、世界最大級の原生林の一隅を占め、豊かな自然を持っているという皮肉な事実のなかで、自然と開発を調和させる英知を、地元の人にも求めているのが印象に残

四六版二六九頁 一九八七年十月
山と溪谷社 定価一二〇〇円
(國見利夫)

雷鳥の尾根

梶 安延 著

日本の高山の鳥のシンボルとされる雷鳥の、珍しい写真集が出版された。早春、雄の縄張り争いから、求愛・交尾に始まり、抱卵・育児の夏を経て、群を構成する秋、そして厳しい越冬に堪えて、再びめぐり来る春…と、季節を追ってさまざまな雷鳥の生活が繰り展げられる。

真白い羽毛をふくらませて、吹雪の雪原にうづくまる姿。鮮やかな朱の冠と黒い尾羽で粧った雄が、春雪に舞う美しさ！ 白い冬羽から茶褐色の夏羽に変化する自然の不思議に、目を見張る思いがする。

そして、決定的な交尾と孵化の瞬間！ 霧雨の這松尾根に、幾日もチャンスを待ち続けた著者の感動がそのまま伝わって来る貴重な記録である。著者は、山岳写真家田淵行男氏の写真集に魅せられて、氏の住む松本市に移住、「十年一つの事に取り組めば、必ず人の心を動かす成果が得られる」という教えのままに、ひたすら雷鳥を

追い続ける、雷鳥のいない山には登る気もしなくなり、雷鳥と離れ難い気がこうじて、とうとう山小屋暮らしをするようになったという。そんなひたむきな心と、十年間の努力の結晶がこの作品となった。

巻末に、中村登流氏の雷鳥の解説がのっているのも読者には親切だ。今後この取材を続けて欲しい。そして、六羽のヒナが一羽だけになってしまいうような自然の厳しさも描けたら、なお一層深みのある作品となると思われる。

一九八七年七月刊 一〇〇頁 定価三八〇〇円 誠文堂新光社
(森 宏子)



会員通信

三月中旬、平均年齢五五歳、女性七名、男性三名のパーティーでボカラからマルシャンディの谷にトレッキング、バグルンパニでマナスルの眺めをたのしみしました。一旦カトマンズに帰り、ネパール・中国友好道路をミニバスで走ってチベットに入りザンムに泊ってランドローバーとジープでティン高原を往復しました。ティンリ高原

では稀に見る快晴にめぐまれ、マカルー、チョモランマ、チョー・オユーの眺めをたのしみしました。

会員磯野剛太氏の連絡によって、中国登山協会の張俊岩、陳榮昌の両氏(ともに中国国際体育旅遊公司勤務)がネパールとの国境までわざわざ来られてこまやかにお世話くださり、誠にありがたいことでした。

(木下是雄(二五六三))

「山案内人の手帳より」の 地元スイスでの反響

岡沢祐吉氏の著書「スイス―山案内人の手帳より」については「山」第五一二号に田口二郎氏により紹介されているが、このたび、これら山案内の地元スイス、グリンデルヴァルトの新聞ECHO VON GRINDELWALD (三月十八日付)に「Japaner führen auf der Spur『日本人先駆者』の足跡を」と題して、二頁に亘り大きくとりあげられているので紹介する。

紙面の関係で全文を掲載することができなくて残念であるが、表紙にスイスの旗の写っている日本語の本を手

にして、本の始まりが後ろのページからで面喰ってしまう。ことから始まっているその紹介記事は、「この本の裏側の部分は、言ってみれば表紙にもなりうる。グリンデルヴァルトの墓地にあるエミール・ストイリの、安らぎの場の墓石の写真があるからだ」として、この写真が選ばれた背景から、グリンデルヴァルトとの結びつきを強調している。誌面からは、著者の労作を地元の人達がいかに評価しているかがうかがわれ、簡潔な文章のなかでの独得な表現は、読者にさわやかな印象を与えている。

この紹介文の最後は、地元グリンデルヴァルトの人達の気持を代弁して、次のような結びの言葉でまとめている。

「この日本人の著者は、山案内仲間が重要視し、大勢のものが―もし読めるのなら―きくと読むであろう作品を作ったことは間違いない。もちろんスイスの殆んどの山案内人や登山家が読むことの出来ないのを岡沢はよく知っている。だから彼も書いているように、彼はこれをドイツ語に翻訳したいと思っている。われわれもそれを望ん

今年もさよならで会いましょう

でいる。ドイツ語版のこの本が登山家仲間感謝されるものであることは間違いない。グリーンデルヴァルト、ツェルマットの場合はなおさらである」その意味でもドイツ語版の早期刊行を大いに期待している次第である。

(松田雄一)

若葉会山行西吾妻山五句

小林 碧郎

雪ふかくスキー昇きゆく路の臺
 羚羊の瞳やさしき雪解露
 雪解風短きスキー負ひ攀づる
 縦柵の秀を縫ひ降る春スキー
 松原湖を落葉松の萌えつつむなり

(六三、五、十四〜十五)

木曾路・秩父路

川崎 精雄

桜散る是より南木曾路の碑
 木曾五木被ふ山々春の雲
 暮遅き木曾の旅宿の下げ看板
 山吹や降嫁の宮の行きし道
 棧道に続く棧道花馬酔木
 雪残る木曾の峠に茂吉歌碑

谷々に一揆の裔や秩父冬
 秩父一揆の村々秘めて山眠る
 凍滝を越ゆれば隠や耶蘇の里

《自然保護随想追悼》

秋田杉とブナ林

ブナの芽ぶきが見たくなって、五月の末に婦人懇談会の有志と、青森、秋田の県境にある二ツ森に出かけた。福田文二さんはじめ秋田、山形の人たち、白神山地の写真集を出した能代の工藤茂美さんが案内してくれた。

二ツ森は海拔一、〇八六、白神山地の南端にある。悪名高き青秋林道の秋田側の終点は、二ツ森の山腹、海拔七五〇付近まで延びている。地元の八森町はブナ林を伐って、二ツ森の八〇〇付近の山腹に杉の苗を植えている。昔から秋田杉は海拔六〇〇以上では育たないといわれてきた。八森町のA木材は、この定説に逆らって七〇八〇〇の高地に杉を植えて実験しているようにみえる。

いまのところ、この実験の第一回目は見事に失敗し、曲りくねった貧弱な杉しか育たなかった。二年前に、この杉は伐られ、跡地に再び杉の苗が植えられた。土壌が杉の造林に適した酸性に変化したのを経験で知っているのか、それとも万一の僥倖を期待してのことだったのか。

か。この二回の植林には補助金が出されているという。

秋田杉はエビ茶の絹糸を真直ぐに張ったような見事な木目を持っている。高所では育ちが悪く、この見事な木目(年輪)は、よりつんで、高価な銘木になろう。八百の高所で杉の造林に成功して、見事な杉の銘木が生産されるようになると、白神のブナが、さらに伐られることになるだろう。それが困る。

二ツ森の八森町域は、ブナを殆んど伐ってしまったが、隣の藤里町はブナを一本も伐らない方針だという。このブナの巨木が林道沿いに見事な景観となつて、遙かな山波に続いている。北の方向、残雪の白神山、向白神山をのぞむと、連なる山波は、びっしりとブナの原生林におおわれ、萌黄色に霞んでいる。

八森町側は、対象的に裸山同然で、山腹は崖崩れが起きて岩盤が露出し、林道に岩屑が堆積しており、沢筋は砂防ダムで土砂崩れを防ごうとしているが、くい止められそうにない。二ツ森山腹の杉の造林も成功するとも思えないが、成功しても、失なわれたものは、より大きい。

(関塚貞亨)

梅咲くや風の上州へ山一重

山小屋の遠き厠や鹿の声

粟穂稗穂祠が分つ毛と武蔵

報告

日本登山医学シンポジウム

医療委員会

去る六月十一、十二日の両日にわた

って第八回日本登山医学シンポジウム

が、群馬県、群馬県教育委員会、水上

町、上毛新聞社、群馬県山岳連盟の後

援を得て水上温泉「去来荘」にて、会

長田中壮信先生(多野総合病院脳神経

外科)のもとで行なわれた。

今年の内容は、一般演題として低酸

素、寒冷が四題、高所環境、循環が四

題、高所環境、呼吸が三題、高所医学

調査、高所障害が四題、山と人が三題

次代に残そう美しい山と溪

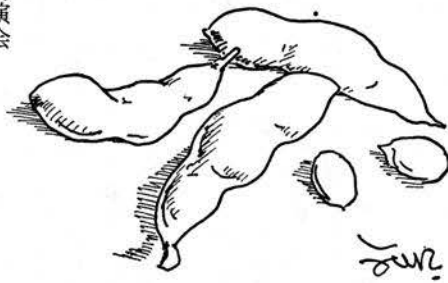
等である。山と人では、吉沢一郎氏が、登山者、登攀者、登山家という演題で氏の登山経験から得たそれぞれの解釈を、中島喜代志氏は、谷川岳を語るといふ演題で、遭難事例を中心にミズ判断の重要性を、高島誠氏は、一九六二年ビックホワイトピーク初登頂の記録映画の上映前に当時は振り返って氏の登山哲学を話された。シンポジウムでは、登山の危険とむずかしさ(一)として、高所登山三題、急性高山病二題、登山者の責任三題、(二)として女性、中高山二題、総説三題であった。

登山者の責任の項では、鹿野勝彦氏がトレッキングにおける問題点を、長谷川恒男氏がガイドの立場から、西崎氏が登山におけるリーダーの責任範囲に関して話された。特別講演は、慈恵医大鈴木政登先生による「登山と水分補給」と東大 川原貴先生による「スポーツにおける疲労」である。

合宿形式による参加者は一五六人で、北は青森から南は九州にいたるまで、一般参加者が多く大変盛会であった。田中会長の言葉をつたえれば、「わざわざ谷川岳の麓、水上温泉までお越し頂きながらゆっくりしていただくことも出来ず、講演は時間に追われ大変迷惑をかけた。しかし幸いなことに、多くの方のお話やご出席をいただ

き、よる遅くまで話し合い、なごやかなうちに無事終了したことに關して幹事役としてうれしく感謝致します」ということである。

なお来年は東京で、昭和大学整形外科教授藤巻悦夫先生が会長で行なわれる。



(浜口欣一)

講演会 「初めてのヒマラヤ」

高所登山研究委員会

五月三十日午後六時半から、本会ホールにおいて、当初の講演会を開催しました。

講師の沢野ひとし氏は今冬のカモシカ同人冬期アンナブルナ登山隊に参加、同隊は北面からアルパイン・スタイルで登攀を行ないましたが、上部氷

河の悪条件のために登頂を断念下山致しました。

現代の海外登山は資料や情報にも恵まれ、登山そのものも容易に思われがちですが、実際に登山活動中に遭遇する山の厳しさは全く変わらないのだといえましょう。講師は、今回の登山体験を通じて感じた、海外登山初心者の方面しやすい困難や危険について述べ、それに対処するためには、国内での、特に積雪期登山の経験や、日常不断的のトレーニングが大切だと結論されています。参加者三十五名。講演に続いて懇親会を行ないました。

(担当者・松永)

W・ウェストン師来日百年
レリーフ建立五十年記念

第四十二回ウェストン祭

信濃支部

日本アルプスの探検と近代登山のパイオニアであり、日本アルプスを世界に初めて紹介した英国人W・ウェストン師の先駆的業績を讃え、上高地梓川の河畔にレリーフが建立されたのは昭和十二年の夏だった。

師のこよなく愛した新緑の上高地に集い、その碑に花を献じて師を偲び会員の旧交を温めようと現在のウェストン祭らしき催しが始まったのは、戦後間もない昭和二十二年だったと聞く。

その後信濃支部主催のもとに連綿と続けられてきたこの催しも今年で四十二回目、ちょうどW・ウェストン師来日百年、レリーフ建立五十年目にあたった。

昨年までほとんど絶えることなく続いてきた徳本峠越え記念山行も、二日ほど降り続いた豪雨により、登山路への増水と欠壊の危険性が高まり、前夜、参加者に児童も相当数いることから、急遽、中止と決定された。

翌六月四日、この峠越え記念山行をぜひまた来年に継承させようと、飯林、東の両支部会員は、昼ごろようやく雨のあがった島々谷を、徳本峠を越え上高地へ向った。峠付近はまだ冬の名残りのおびただしい残雪に覆れていた。

当日の夕刻より上高地温泉ホテルで行なわれた前夜祭は支部会員等五十名の他、本部から佐々前日本山岳会会長、関塚理事(自然保護担当)、岡沢理事(会報担当)、そして立教山岳部のナンダ・コート初登頂より五〇年目の昨年、全員再登頂を果して意気盛んな松本市出身の太田晃介理事等を迎え、赤羽孝一郎新信濃支部長の挨拶から始まって、今年もまた小梨の花の咲く頃、この上高地で会えた喜びをかくしきれない会員達が、夜遅くまでにぎやかに山談議を繰り広げた。

翌日、六月五日の碑前祭はウェストン広場において、朝方の曇空も次第に青空が広がり、雨あがりの霞沢岳が美しく見渡せる中、約千人の参加者を得て午前十時より行なわれた。

本年四月、七代信濃支部長に就任した赤羽孝一郎が初挨拶、日本山岳会が、W・ウェストン師と創立会員との邂逅により創立され、その後、会もこのウェストン祭も毎年多数の会員や参加者を得て発展してきたことをふまえ、『多逢聖因縁尋機妙』と結んだ。

続く献花は安曇村小学校四年男女児童、エーデルワイスクラブによる「ウェストンの歌」の献歌の後、来たるべき夏山の安全を祈って黙祷。

今回は会長、副会長とも北京で行なわれているチョモランマ三國友好合同登山成功祝賀会に出席のため、佐々前会長、関塚理事が挨拶、協賛団体を代表して上条久芳安曇村長より祝辞が述べられ、尾崎喜八の詩「ウェストン祭に」を細井澄子支部会員が朗読した。

続く第二部の記念行事は「日本アルプスとウェストン」と題して安江安宣岡山大学名誉教授の講演、ウェストン師とのち日本山岳会創立会員となった岡野金次郎氏らとの出会いの新資料等を発表された。

終りにエーデルワイスクラブ、アル

プス少年少女合唱隊による「喜びの歌」「夏の山」の合唱の後、参加者全員で「雪山賛歌」を合唱し、また来年の再会を誓って、第四十二回ウェストン祭は無事終了した。

(三溝関治郎)

越後支部

懇親山行報告

陽足の一歩長い梅雨入りの頃、山々の巖に白く輝く越後の山は、最も長く行動できる時季です。越後支部巻機山行は、「山」に二回も掲載されたので、遠く北九州、高槻、関東近辺、山形と、当日参加を含めて会員四十五名(支部員三十名)、会員外十五名、小学四年男子(九歳)二名、計六十二名と多くの参加を得ました。

六月十一日夕刻、民宿「山五」にやや遅れて集合。山崎会員の司会により、佐藤支部長挨拶、筑木会員の「越後の山の特色」で、その自然の良さと危険が話され、当館の小野塚照治会員の行動予定連絡があり、雨七きこと斎藤平七前支部長の音頭で乾杯でした。自慢の山菜料理と程よく興に乗ったところで、本館はこちらと清水屋、泉屋の三軒に分宿、盛大な天気祭りとになりました。

十二日、テレビでは他地方は雨でも、新潟地方のみ晴の予報。巻機山行(三十九名)は桜坂まで、清水峠行(十八名)は追分まで、車に分乗となる出発風景でした。

巻機山班は、当日参加の込山リーダーの下、須藤・成海・細島諸兄ら峽彩会員の支援と山五の当主、小野塚高一氏の案内で桜坂七時の出発。すぐ尾根を回り込む処で、行手にある天狗岩が曇空の下、黒く距立している。割引沢沿いにタニウツギや青大将の歓迎を受け、二、三のへつりと雪渓で落合に。低温で消えの遅い今年は、沢びつしりの残雪も、ここは開けて雪融水が流れている。左のヌクビ沢へ。笹藪の登りに手こずる嶋海彦君は、山形の会員に守られて登る。雪渓では、ともすれば滑りがちな平底靴に四本爪を付けてからは、最後部より中程に追付く元気の良さに、アンカーもびつくりする程でした。登る程に天候は晴となり、ヌクビ沢兩岸尾根近く、殊に黒ツブネにある白、桃色と咲くシヤクナゲ群落と、灰白色の木肌が褐色の岩と、青空に映えて一服の桃源を覚えさせる景でした。巨体に足を庇う急傾斜も終えると展望のある稜線。一等三角点本点の割引岳を往復し、お機屋の草原に大団欒。上田富士を下に見、駒ヶ岳を中にした越後三山、その右に荒沢岳、鬼岳

とあとは牛ヶ岳の山の後で見えない。まどろみの世界に、また牛ヶ岳に急ぐ一団ありで、支部山行は、昨秋の苗場山行に続く好天に恵まれました。

下山に前巻機での記念写真は、腕の程は定かでない。五合目、最後部が着くと、先頭はもう出発では割があわな。かくて一時間余の遅れで桜坂に着き、再び車で清水に下山しました。

清水峠班にも、巻機山班同様の楡井恵太郎君を含めて十八名。老齢者もあり、追分より登川を渡り、ハルゼミが耳に繁く、井坪尾根の急坂は、心臓にやえぬよう登る。稜線近く路に雪も出、昔より幾多の人が越したのであろう清水峠も、風が少々肌寒く感じては、巻機山が見える所まで戻り、心ゆくまで春から初夏への山を楽しむ。謙信尾根を下り、予定どおり清水へ下山。

巻機山班を待って一同、また山で会いましょうと解散になりました。設営を担当された方々、ありがとうございます。

参加者 青木督平、安土武夫、岩下光男、岩下香代子、川善市、小松原恵子、込山孝、坂井厚、佐々木幸作、佐藤一栄、斎藤かつら、斎藤喜一、斎藤弘、田村説三、中川久、蒔沢庸昭、早川英夫、原田衛、東原進、平岡誠一郎、藤田礼子、堀かよ子、山崎幸和、吉村健児、小田薫、佐近丸彦、宮崎和

夫、阿部喜久治、遠藤家之進正和、加藤明文、加藤記代子、久保孝一郎、近藤友好、佐藤徳松、田中純夫、滝沢芳章、筑木力、平松勝司、山田勲、楡井利幸、小野塚照治、上村幹雄、斎藤平七、望月力、曾根義一

(坂井 厚)

北海道支部総会

北海道支部総会は、六月三日札幌駅前通り雪印パーラーで開かれ、昭和六十二年度事業報告、収支決算、昭和六十三年度事業計画、収支予算、支部役員選任、支部二十周年記念事業等の案件が、満場一致承認された。

このあと懇親会に移り、支部山行、狩場山、観月会山行ホロホロ山や、各自登山行や近況を語り、ビール、スコッチウイスキーを酌み交し、二次会『鶴』へ移る。LILASの薄紫の花が芳香豊かに、札幌大通りを彩る。支部総会には時間の都合で出席出来なかった会員も、鶴で二、三人加わり大いに気炎を上げ、語らいの輪は夜半まで続いた。

◎支部長 橋本誠二。副支部長 芳賀孝郎、小林年、野田四郎。支部委員 自然保護Ⅱ辻井達一。会報Ⅱ小野肇、久保田優一。集会Ⅱ柳田涼子、亀井秀子、澤田良子、三浦勝幸。海外Ⅱ石崎

貞子、高松秀彦。記念Ⅱ高澤光雄、浅利欣吉、新妻徹。地域Ⅱ河村章人。事務局Ⅱ平野明。監事Ⅱ井後幸太郎、木下恵子。

◎昭和六十三年度事業予定

七月十六、十七日 大雪山の集い88

十月一、二日 岩内町

十二月十日 支部忘年会

三月四、五日 スキー合宿

出席者 小林年、高澤光雄、菅原修三、井後幸太郎、三浦勝幸、藤野和男、中島英彦、柳田涼子、朝比奈英三、高松秀彦、赤石恵恵子、向井成司、野田四郎、小須田喜夫、澤田良子、新妻徹、橋本誠二、平野明、大久保五郎、辻井達一、高橋邦臣、上島忠義、米村清一、沼崎勝洋、佐々木孝雄。(平野 明)

秋田支部総会報告

六十三年度の秋田支部総会は、去る五月十四日午後三時より、秋田市の協働ビルにおいて開催された。主なる内容次の通り

◎昭和六十二年度事業報告

◎昭和六十二年度決算監査報告

◎昭和六十三年度事業計画

山行(春・御岳山、秋・高松岳Ⅱ東北支部集会)、会報発行二回、その他◎昭和六十三年度予算案

二十三万円。本会還元金による増額◎支部会員確認 五十名。支部変更三名、退会四名、入会予定者五名

以上承認され、続いて役員改選に入り、懇親会の後、午後八時散会した。

▽新役員は次の通り

支部長(岡田光行)、副支部長(福田文二)、常務委員(佐藤兼治、佐々木民秀)、委員(進藤昭、佐藤昭義、北林嘉鶴子、高橋守、宮田菊雄)、監事(藤原健、打矢道雄)

東海支部報告

昭和六十三年度、東海支部通常総会が五月二十八日、六時より、鍋尾上機械において開かれた。六十三年度事業計画は、六月、針之岩登山隊。六月、八月、天山、雪蓮峰登山隊。八月、インドヒマラヤ、ヤン峰登山隊を派遣。その他、奥三河等国内山行。東海山岳、支部報の発行等である。東京より鈴木郭之常務理事が参加。

福岡支部報告

昭和六十三年度、福岡支部総会は五月二十二日(日)午後二時から、福岡市長良区西新の西新パレスで開催された。

昭和六十二年度事業、収支決算および監査報告、昭和六十三年度事業計画、予算案が承認され、次のとおり支部委員が選出された。

この後「ナンダデヴィ縦走」日本山岳会編を上映、出席者から大変好評だった。今後も機会を作りこのような催しを計画したい。

六十三年度の事業には、支部設立三十周年行事としてパキスタン西北部への十六日間のトレッキングや年間山行を多くし会員の親ほくを計ることとし



昭和 63 年度福岡支部総会

た。総会終了後、懇親会にうつり、午後七時解散した。

◎支部役員

「支部長」 権藤太郎 「副支部長」 吉村健児 「委員」 自然保護 松本征夫、松本康司 事業 堤甚五郎、白石宣夫、新貝勲、一山了、佐野昇三、足達敏則 事務局 深田泰三、古賀久男、斉田貴典、副島勝人、倉智清司 監事 田代実、平野隆司
出席者 末松大助、権藤太郎、村上

追悼

「ボンコ」さん

(奥貞雄氏)を憶う

長谷川清三郎

「ボンコこの頃こないなあ」ともう八十歳そこそこ或は以上の老人ばかりの会で、しばらく顔をみせない奥氏の話がでた。この会は初めほんの少人数でスタートして十数人に増え、私も大分して加えられたが、その後は減るばかり。毎春、秋、京都での会合には、夫人も加わって、二十人ちかい出席者があった。元氣旺盛、山へ行った我々も、ぼつぼつくたばる年齢になった。私が会にでるようになってから、わずかの間に数

般、吉村健児、阿部克雄、小野一丸、田代実、松本征夫、新貝勲、堀田哲男、松本康司、倉智清司、副島勝人、斉田貴典、深田泰三、古賀久男、大石義豊、一山了、松岡憲二、江月香月、藤野忠臣、浦一美、山下朋美、成末洋介、佐野昇三、渡部秀樹、児玉俊子、植松満男、諸岡久四郎、小山田秀明、井上優、野田多恵子、上岡謙一、白石宣夫、井上一磨、岡本康夫、辻和毅、中山健 (深田泰三)

人がこの世を去って行った。奥氏もその一人である。奥氏と同じ頃に卒業したT、H、S、Hの諸兄は既にこの世になく、奥氏は会の名の通り長寿を全うせられた方であるが、気の毒にも晩年は病床の期間がながかったようだ。

私が奥氏と山行をともにしたのは、冬の白頭山行(昭和九年十二月(翌一月)だけ。私は現役、奥氏はOB。但しT先輩(故人・前出)と長期のアルプス旅行から帰国後まもない、はりきりのちやきちやきとき。山行では偵察班として活躍し、ベースキャンプでは酒豪の一人でもあった。

・会務報告

六月理事会 六月八日午後六時三十分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木副会長、松永、織田沢、太田、浜口、大橋、新井、橋本、関塚、岡沢、勝山、西村、鳴原、大森各理事、松田、山野井、広羽各評議員、

委任 田部井、早坂、鈴木各理事、小倉評議員、太田監事。

審議事項

法政大学ランタンリルン登山隊推薦状発行の件 承認

会報記事転載依頼の件 承認

環境庁上高地ビジターセンター使用許可願提出の件 承認

報告事項

●三国登山 五月二十七日カトマンズにて記念式典 六月三日北京人民大会堂にて記念式典 六月四日北側隊員帰国 六月十七日、東京にて記念式典 六月十八日、日本山岳会主催の報告会、懇親会

●財務 戦略的事業の執行、事業の追加についてのお願い。

●総務 支部長会議報告、支部事務局担当者会議の件、三国登山報告会準備状況について、ルーム使用についてのお願い。

●山岳 山岳八十三号及び、総索引編集の進捗状況について。

●自然保護 上高地冬期旅館営業の件。

●集会 五月十四、十五日若葉会山行、六月一日同写真交換会、六月二十一日講演会「石間流山登り」

●図書 地方小出版情報誌定期購読と小出版社発行の山岳関係図書の充実に

ついて。

●科学 探索山行予定、談話会について。

●山研 上高地地域内集中浄化費用負担について。

●資料 談話室内戸棚改造と整理について、大町博物館「ヒマラヤ展」資料貸出について。

●フィルム「日本の山」スライド収集完了、映写会「冬期エベレスト」報告。

●山日記 次号より掲載予定の会員住所録について。

●婦人 シヴァ計画書配布、白神山地山行報告、シヴァ登山雪上及び低圧訓練予定について。

●高所 講演会報告、高所登山委の活動と他委員会の連携の必要性について。

●指導 シヴァ登山隊雪上訓練について。

●その他 ウェストン祭報告。

●村木副会長より、JACCのヴィジョンを考える準備会予定について。



(6月)

4日	A・カーター氏 講演会	24日	図書委員会
6日	婦懇、自然保 護、総務	27日	自然保護委員会
7日	映画会「冬期エ ベレスト」	28日	海外「ジャワの 山登りから」
8日	常務理事会、理 事会	29日	フィルム委員会
10日	科学委談話会 「高山植物」	30日	資料委員会、婦 懇
13日	総務委員会	6月来室者517名	
14日	婦懇「地図作成 実習」		
15日	海外委員会、三 水会	会員異動 6月	
16日	学生部「机上技 術講習会」	姓名変更	
17日	故水腰英隆ドク ター追悼会	吉沢実万(一〇一七九)	
20日	総務委員会	↓高橋実万	
21日	講演会「石間信 夫流山登り」	物故	
22日	山研委員会	岡本包夫(四〇六七)	
23日	自然保護、婦 懇、学生部	鈴木真吾(五一七三)	
		4・4	
		大島永明(五一三)	
		88・2・1	
		終身会員へ	
		大森弘一郎	
		(四五三二)	
		若林啓之助	
		(二八二四)	
		支部長交代(昭63年 度より)	
		熊本支部 奥野正亥	
		(一八一八)	
		信濃支部 赤羽孝一郎	
		(三八〇二)	



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●JAC夏の恒例・

ビアパーティ

日時 九月三日(土) 十七時より
場所 日本山岳会 集会所
会費 二〇〇〇円
飲み放題食べ放題!!

婦人懇談会

●集会委員会

現地小集会

●『八十里越』

越後と南会津を結ぶ街道を、守門を眺めながら ゆっくり歩いてみませんか。

集合 昭和六十三年九月十日(土)
東三条駅 午後二時四十分
コース 九月十日(土)
東三条駅―遅場―吉ヶ平山荘

(泊)

九月十一日(日)
吉ヶ平山荘―鞍 峠―八十里越―入叶―只見駅 解散

会費 二千五百円(宿泊費・夕食及

び懇親会費)

申込先 九月三日まで事務局宛ハガキ
でお願いします。

●『谷川・大源太山』

上越のマッターホルンと呼ばれる山
十月二十三日(日)

●『四阿山』

山頂のパノラマが素晴らしい山
十一月二十日(日)

●『権現山』

中央線・上野原にある快適な山歩き
が出来る山
十二月十八日(日)

それぞれの集合時間等は検討中につき
集会委員に問い合わせ下さい。

●自然保護全国集会は

九月三、四日

上高地で開催

●自然保護活動報告・討論会

九月三日(土) 午後一時に受付、二
時討議開始、場所は上高地 西米屋山
荘、議題は『山岳地帯における大規模
開発と自然保護』

●会費は西米屋山荘宿泊費、懇親会費
込み(一泊三食つき) 一万二千元。

●申込みは山岳会事務局まで(締切り
八月二十五日)。

●講演会のお知らせ

日時 十月二十五日(火) 十八時三〇分
講演 「映像の変遷」
―テレビにおける

山岳撮影の歩み―

●図書交換会

今年も、左記により恒例の図書
交換会を開催いたします。

会員諸兄弟のご参加と、お手元
の不要図書のご出品をお願いいた
します。

なお、地方在住の会員の方も、
奮って、図書をご出品下さい。宅
急便で、リストとともに送下さ
さい。

記

日時 十月二十二日(土)

午後二時より

場所 ルーム集会所

図書委員会

三國友好登山会募金応募者(芳名
(七月十五日現在、一口五千円)

(一口) 赤沼節。吉見良一

〔累計 一、九四一・二二〇。八五八名。
金額 九、七〇五、六〇〇円〕

講師 川合 周 他、現役カメラマン

(元NHKプロデューサー) 予定

会費 二百円

フィルム委員会が題記の講演会を開
催します。昨年までNHKで活躍され
ていました川合さんに、初期の手巻き
撮影機時代から現代のビデオ時代まで
プロデューサー、カメラマンのご苦労や
裏話などです。

フィルム委員会

編集後記 このところ各種原稿がたく
さん集っており、寄稿された方々にご
迷惑をおかけしているようですが、逐
次掲載してゆく予定ですのでご諒解の
ほどお願いいたします。

▼なお編集方針としましては、新人の
ものを優先して掲載し、何回も登場さ
れる方はその次というようにしてお
りますので、この点お含みお下さ
いますようお願い致します。(編集)

昭和六十三年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビニューハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座 東京三三―四八二九番

印刷所 株式会社 技 報 堂